

〈50周年記念号に寄せる〉  
研究・教育の危機とサバティカル制度

鳥越輝昭

所員のみなさまのご厚意により、2007年度から2期、4年のあいだ所長を務めさせていただいた。わたくしは「長」という名のつく学内の仕事をするときには、これも修行だと考えて、ひたすら耐えるのだが、人文学研究所の所長は例外的にこころよい役職だった。理由は3つ。

- (1) 常任委員と事務方が良かった。4年のあいだ、常任委員会はつねに和やかだった。その間の常任委員は、村井まや子、村井寛志、平井誠、尹亭仁の諸先生、事務方の中心は設楽英子さんだった。
- (2) この「長」の仕事は、学内政治とほとんど関わりが無かった。
- (3) 神奈川大学の研究と教育をサポートする仕事をしている実感があった。

もっとも、わたくしが所長をしていた頃に出来たことはわずかで、つぎの4つぐらいしかない。

- (1) 『人文学研究叢書』を毎年2冊出版できるように、1冊分の追加予算（「特別予算」）を獲得したこと。
- (2) 『人文学研究所報』を年1冊から2冊の刊行に変更し、寄稿が活発化したこと。
- (3) ヴェネツィア・カ・フォスカリ大学のトッリーニ先生とカーロリ先生などを招いて国際シンポジウム「表象としての〈日本〉：近代ヨーロッパの場合」を開催し、それが外国語学部とヴェネツィア大学東アジア学科（現アジア・地中海沿岸アフリカ研究学科）との学術交流協定と留学生交換協定の締結へ繋がったこと。
- (4) 神奈川大学出版局をつくるべきだとの尹亭仁常任委員の提案を受け、常任委員会が合意し、各研究所長の出席する「研究委員会」でわたくしが提案し、のちに神奈川大学出版会が出来たこと。

ところで、わたくしは近ごろの人文学研究所の様子を見ていても、神奈川大学は研究と教育の危機にあると感じている。人文学研究所自体が悪くなったという意味ではない。人文学研究所についても、所員が訪れて寛ぐ時間がなくなったということである。

原因は、ひとえに校務の増加にある。校務と授業準備とに忙殺されて、研究所で寛ぐ時間など無いのである。授業の準備は、教員の本来の仕事である。問題は、委員会業務等の校務である。

わたくしが神奈川大学に赴任した20数年前に比べれば、現在の校務の分量は7～8倍、所長をし始めた5年前と比べても、3倍程度に増加しているように感じる。

授業準備と校務とを終えると、研究のための時間はほとんど残らない。

しかし、研究も教育も本来、「暇」が無ければ良質のものにはならない。研究論文などの業績も、教室で教える内容も、じつは「片鱗」である。「片鱗」がキラリと輝くかどうかは、本体の「魚」がどれほど大きく豊かに育っているかに左右される。「魚」の体格と質は、直接の研究資料はむろんのこと、間接的にかかわる資料を、どれほど広く深く読み込み考察しているかに左右される。そのためには「暇」が必要である。学校の「スクール」も学者の「スコラー」も、どちらも「暇」という意味の「スコレー」を語源にしていることは、不変の真実をふまえているのである。

教員が「暇」を失った神奈川大学は、遠からず「スコラー（学者）」を失い、「スクール（学校）」で

もなくなって、崩壊するだろう。

崩壊を防ぐにはどうすればよいか。ひとつの方法は、「サバティカル」制度の変更と拡大である。「サバティカル」は「暇」をつくる制度である。現在は、長年奉仕してきたことへのねぎらいとして、定年に近づいた教員に与えられることが多い。それでは、有効な「暇」の作り方にならない。

「サバティカル」は、赴任から7年目には与えるのがよい。そして、さらに6年働くごとに与える。現在の「サバティカル」は1年間だが、期間は6ヶ月に短縮してかまわないから、適用者を大幅に増やすと良い。神様も、6日働いたのちには、1日休んだのである。

現在本学の教学と法人の要職にある方々をお願いする。「サバティカル」制度の変更と充実を実現していただきたい。事は焦眉の急である。

(とりごえ てるあき。外国語学部教授。2007年度～2010年度に所長)